



ブユ(ブヨ)に要注意！！ブユの被害が出ています。

「蚊に刺されたかな？」と思っていたら、後からみるみる腫れてきて、激しいかゆみが出てくることはありませんか？

その虫刺されは、蚊ではなく、ブユによるものかもしれません。

ブユは、ハイキングやアウトドアなどの季節に、山間部に多く発生し、刺されると激しいかゆみや腫れ症状を引き起こす厄介な虫です。湿気の多い草むらでも多く見られます。

蚊であれば、数時間で症状が治まるはずなのに、時間がたつとどんどんかゆみが増していくので、「刺されたのは蚊ではないな」と誰もが気がつきます。

蚊よりも症状が重く発赤や腫れなどがともないます。

ブユ(ブヨ)ってどんな虫？

ブユは、体長1～5mmほどの丸みを帯びたコバエのような体つきで、春から夏にかけて水辺近くの草むらなどで発生します。日本全国に見られ、地方によってはブヨ、ブトと呼ぶこともあります。

蚊との違いは、血の吸い方と毒性の強さにあります。

蚊は、針のような口を刺して毛細血管から吸血するのに対し、ブユは羽音を立てずに近づき、ノコギリ状の口で皮膚をかじり、流れ出た血をすすります。このとき、皮膚の中に注入されるブユの唾液成分は、蚊のものよりも毒性が強いため、激しいアレルギー反応と炎症を引き起こします。

症状

ブユによる虫刺され症状の特徴は、刺されている時の自覚症状が少なく、刺されてから半日～翌日以降に強い腫れとかゆみが出ることです。また、皮膚をかじって吸血した痕が、点状の出血や内出血として残ることがあります。

蚊による虫刺されの症状は、通常数時間で治まりですが、ブユによるかゆみや腫れの症状は、時間とともに徐々に強くなるのが特徴で、赤いしこりが長く残ったり、色素沈着を起こしたりすることもあります。もちろん、症状の出方には個人差がありますが、例えば手の甲を刺された場合、手全体が腫れあがるような強いアレルギー反応が出ることも珍しくありません。

ブユに刺されやすい時期や場所

ブユは日本全国の山間渓流域に生息していて、春から晩夏にかけての繁殖期に吸血します。朝や夕方時間帯に刺されることが多いので、そのような時間帯に活動する際は充分注意してください。

ブユに刺されないための対策

ブユを完全に駆除することは難しいので、刺されないためには、防御が大切です。

ブユに刺されないために大切なことは、肌を露出しないことです。ブヨがいそうな場所へ行く時は、長袖長ズボンを履くのはもちろん、ズボンの裾からの侵入を防ぐためにも、靴下を履いてガードしましょう。さらに、ブユに効果のある虫よけスプレーを組み合わせると、より効果的です。

また、ブユは暗い所を好み、ブラックやネイビーなどの濃い色の服に寄ってくる習性があるため、ホワイトやイエローなどの明るい色の服を着てブユを寄せつけないことも大切です。

治療法

ブユに刺されると、ブユの唾液に含まれる毒素によって皮膚に激しい炎症が起きます。かゆみ、腫れなどの症状が出た時は、十分な強さのステロイド外用剤を使って、炎症を抑える必要があります。患部を冷やすことも効き目がありますが病院での治療をお勧めします。自宅で治療する場合は、ステロイド成分を配合した市販の治療薬を活用しましょう。

ブユによるかゆみはしつこく、とてもかゆいので、つい掻きむしりたくなりますが、掻くのは厳禁です。掻き壊してしまうと周囲に炎症が広がってジュクジュクしてきたり、そこから細菌が入り込んで化膿したりする恐れがあるからです。

かゆみが強く、掻くのを我慢するのが難しい時は冷やす・掻かずにたたくなどいて掻き壊さないようにしましょう。

市販薬を5～6日使用しても改善しない場合や、痛みがあつて腫れがひどい場合は、自己判断せずに、医療機関を受診しましょう。

その他の虫刺され

ブユのほか吸血性の蚊、ダニ、ノミ、身体に毒を持ったハチ、毛虫、ムカデ、クモなどがいます。

虫に刺されることで、虫の毒液や、虫の唾液成分などの異物が皮膚の中に侵入し、皮膚に炎症が起きます。

予防法としては、

ブユ（ブヨ）と同じように肌の露出を避けることです。

毛虫の予防法は毛虫の毛が肌につくことでアレルギー反応が起きるので洗濯物を取り込むときによく叩くことや毛虫が発生している木のそばを通らないようにすることも大切です。

